様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ７ 月 ２２ 日現在

機関番号：１２６０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｈ０３４９４

研究課題名（和文）ソ連・東欧におけるホロコーストの比較研究

研究課題名（英文）Comparative Studies on the Holocaust in the Soviet Union and Eastern Europe

研究代表者
高尾　千津子（TAKAO, chizuko）

東京医科歯科大学・教養部・教授

研究者番号：００２４７２６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,400,000円

研究成果の概要（和文）：　独ソ戦によってナチの支配下におかれた地域のホロコーストの特徴は、ユダヤ人の殺害が現地で執行されたこと、ナチによる占領の初期段階で、現地住民の一部がユダヤ人に対するポグロムに関与したことに求められる。
本研究は、ソ連・東欧におけるホロコーストの事例研究に取り組み、現地住民のナチ協力に関しては、新たにソ連の支配下に入ったバルト３国やポーランド東部地域とソ連本国内の東ベラルーシ等とで相違があることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本では、アンネ・フランクの日記はよく読まれており、アウシュヴィッツ強制収容所の存在もよく知られている。しかし、ホロコースト犠牲者の多数を占めるのは、アンネのようなドイツのユダヤ人ではなく、ポーランドやロシアのユダヤ人であったこと、ホロコーストの主要な現場はアウシュヴィッツ等の収容所の他に、独ソ戦の戦場現地であったことは、一般にはほとんど知られず、また研究においても、独ソ戦下のホロコーストの事例研究は決定的に不足している。このような現状に鑑みて、本研究では、一般社会ならびに学界に対し、ホロコーストに関する正確な知見を発信につとめた。

研究成果の概要（英文）：The Holocaust in the regions that the Nazi occupied as a result of the German-Soviet War is featured by the following points. First, the massacres of Jews were carried out in the field, rather than by transferring them to concentration camps. Second, in the early period of the Nazi occupation, parts of the local population were involved in pogroms against Jews. However, Japanese scholars have hardly conducted any empirical studies on the Holocaust during the German-Soviet War.
Our case studies on the Holocaust in the Soviet Union and Eastern Europe during the German-Soviet War and investigation on the problem of memories after the War have revealed that especially in terms of local people's collaboration with the Nazi, there were differences between the Holocaust in the Baltic countries and the eastern part of Poland and that in the Soviet Union, such as eastern Belarus.

研究分野：西洋史

キーワード：ホロコースト　ソ連史　東欧史　ユダヤ人　第二次世界大戦

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

1941 年 6 月に始まる独ソ戦では、ソ連西部（1939 年 8 月末の独ソ不可侵条約に付随した秘密議定書に基づく交渉でソ連支配下に入ったバルト３国、ベラルーシおよびウクライナに併合されたポーランド東部地域を含む）の推定 270 万人のユダヤ人がナチ・ドイツの占領下におかれ、その 96%がナチによるホロコーストの犠牲になった。(Yitzhak Arad, *The Holocaust in the Soviet Union*, Jerusalem 2009.)ソ連におけるホロコーストの最大の特徴は、大ドイツ帝国領域やポーランド総督府等と異なり、ユダヤ人の大量殺戮が絶滅収容所あるいは強制収容所への移送によってではなく、現地で行われたこと、またバルト３国や、旧ポーランド東部地域であった西ベラルーシや西ウクライナでは、ソ連支配に反発する現地住民がナチ・ドイツの侵攻をソ連支配からの解放とらえ、特にナチ占領直後に発生したユダヤ人に対するポグロムの協力者になったことに求められる。

戦後、ソ連政府は、ドイツ軍撤退と同時に自国のナチ協力者に対する捜査と厳しい処罰を執行したが、他方では、この自国民のソ連支配に対する反発とナチ協力という事実が、ソ連政府をして、半世紀にわたってホロコースト研究そのものを封印する要因となった。また、西側諸国の研究者は、冷戦下の鉄のカーテンに阻まれ、東欧諸国やソ連国内の文書館に保存された一時史料に自由にアクセスすることができず、ホロコーストの実証的研究は阻害された。この状況は、冷戦終結と、1990 年代のソ連ならびに東欧諸国の体制転換後に劇的に変化する。欧米では、この 20 年の間にホロコーストの実証的事例研究があいついで出版されるようになった。

ところが日本では、体制転換後、旧東欧諸国やバルト３国がヨーロッパ連合への加盟をめざすにあたり、自国民のナチ協力問題に関して国家の歴史認識を明確にするよう迫られたこともあり、ロシア、東欧現代史研究者の関心は、ナチズムとスターリニズムをめぐる東欧各国の歴史認識問題に集中した。結局、ホロコースト期にソ連、東欧のユダヤ人に何が起こったのか、必ずしも正確な知識がないまま歴史認識にかかわる議論のみが先行しているのが日本の現状である。

２．研究の目的

１の「研究開始当初の背景」で述べた日本の研究の現状に鑑み、本研究の目的は、第１に、旧東欧諸国ならびに旧ソ連で起こったホロコーストの個別事例に関して実証的な研究を行うこと、第 2 に、それらを踏まえ、旧東欧諸国ならびに旧ソ連におけるホロコーストの記憶と歴史認識の問題点の探求におかれた。

３．研究の方法

「研究の目的」欄で述べた第１、第２の目的を達成するため、本研究は２班にわかれて行われ、そのなかで各班員が、分担する研究テーマに即した一次史料や研究文献の収集と読解、現地視察等を行った。班の構成と各班員の研究テーマは以下の通りである。

(1)東欧・ソ連におけるホロコーストの実証的研究

野村真理（ベラルーシのホロコースト）、武井彩佳（民族ドイツ人とホロコースト）、井出匠（スロヴァキアのホロコースト）、ヴォルフ・デイヴィット(バルト三国)

(2)東欧・ソ連におけるホロコーストの記憶と歴史認識

高尾千津子(ソ連におけるホロコーストの記憶とその弾圧)、鶴見太郎(戦間期ロシアのポグロム表象と歴史認識)、宮崎悠（ポーランド・カトリックのホロコーストをめぐる歴史認識)、小森宏美（ラトヴィアのホロコーストをめぐる社会的記憶の形成）

また、本研究の代表者、研究分担者によってはカバーしきれないリトアニアについては、重松尚(東京大学・院)、ソ連のホロコーストについては、イリヤ・アルトマン（ロシア・ホロコース

ト研究教育センター代表)、キリル・フェフェルマン(イスラエル・アリエル大学)その他の協力を得た。

４．研究成果

(1)東欧・ソ連におけるホロコーストの実証的研究

特筆すべき研究成果として、本研究の最終年度に実施したシンポジウム「ソ連・東欧のホロコースト」(2018 年 10 月 28 日、早稲田大学戸山キャンパス）において、野村により、報告「ミンスク・ゲットーの抵抗運動」、研究協力者である重松により、報告「リトアニア人行動主義戦線の反ユダヤ主義」、井出により、報告 ”Persecution of Roma in the Slovak State”が行われたことがあげられる。いずれも、日本では、これまでまったく手が付けられていなかった研究である。

シンポジウムでは、野村と重松の研究により、1939 年にソ連の支配下に入ったリトアニアでは、ナチ占領直後に現地住民によるポグロムが発生したのに対し、ソ連本土のベラルーシのミンスクでは、そのようなポグロムは発生しなかった経緯が明らかにされた。また、シンポジウムでは、井出報告と組み合わせて、ノルウェー、オスロのホロコースト研究センターの Anton Weiss-Wendt 氏により、報告 “ Mass Murder by Design: The Nazi Treatment of Jews and Roma Compared”が行われたが、ユダヤ人とロマの比較とならび、ロマに対するホロコーストについては、今後、スロヴァキアと同じくナチ・ドイツの同盟国で多数のロマ人口を持つルーマニアやハンガリーとの比較が重要になるだろう。なお野村の報告は、論文としてまとめられ公刊された。(野村真理「ミンスクのホロコースト――ユダヤ人抵抗運動の成果と限界」　前篇・後篇、『金沢大学経済論集』第 39 巻第 1 号、第 2 号、2018／19 年)。

さらに、日本では決定的に情報量が少ないソ連のホロコーストに関して、　キリル・フェフェルマン　(イスラエル・アリエル大学)を招聘し（2017 年 3 月)、報告「ナチ占領下ソ連の非アシュケナズ系ユダヤ人の運命」をいただき、本研究に関連する貴重な知見を得ることができた。

(2) 東欧・ソ連におけるホロコーストの記憶と歴史認識

同じく 本研究の最終年度に実施したシンポジウム「ソ連・東欧のホロコースト」において、高尾が、本科研費研究の成果として報告「ウクライナ・ユダヤ民族地区の絶滅――独ソ戦期の隣人の証言」を行い、宮崎が報告 “Nationalism and Catholic Images in After War Pooland”を行った。

また、小森と野村は、エストニア、ラトヴィア、ルーマニアのホロコーストをめぐる歴史認識に関して、橋本伸也(編)『せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題』（ミネルヴァ書房、2017 年）に以下の論文を寄稿した。小森「エストニアとラトヴィアの社会統合――歴史教育による国民化と社会的と包摂の行方」、野村「ルーマニアにホロコーストはなかった？――ルーマニアの民族浄化」

さらに、海外より以下の研究者を招聘し、本研究に関連する貴重な知見を得ることができた。

イリヤ・アルトマン（ロシア・ホロコースト研究教育センター）「反ユダヤ主義とホロコースト否定論に対する現代ロシアにおける抵抗、2017 年 7 月。

Katarzyna Person (Jewish Historical Institute in Warsaw, Poland), Acculturated Jews during the Holocaust and Postwar Polish-Jewish Relations, Oct. 2018.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 10 件）

①野村　真理、ミンスクのホロコースト――ユダヤ人抵抗運動の成果と限界（後篇）、金沢大学経済論集、査読無、第 39 巻第 2 号、2019、1－31.

DOI:10.24517/00054847

②鶴見　太郎、自己を側面に分けて考える――ロシア・ユダヤ人がロシアを離れるまでの歴史、東京大学アメリカ太平洋研究、査読有、第 19 巻、2019、23－36.

③野村　真理、ミンスクのホロコースト――ユダヤ人抵抗運動の成果と限界（前篇）、金沢大学経済論集、査読無、第 39 巻第 1 号、2018、1－28.

DOI:10.24517/00053360

④武井　彩佳、ドイツの歴史教育を支えるもの――修正主義の排除と「生きた」歴史、神奈川大学評論、査読無、第 90 巻、2018、72－79.

⑤高尾　千津子、変容するロシア・ユダヤ人の歴史像、ユダヤ・イスラエル研究、依頼原稿、第 31 号、2017、17－24.

⑥宮崎　悠、アイザイア・バーリン「２つの自由概念」の歴史的背景、現代思想、依頼原稿、第 45 巻第 9 号、2017、233－245.

⑦鶴見　太郎、極右政党「イスラエル我が家」の背景、ユダヤ・イスラエル研究、依頼原稿、第 31 号、2017, 25－34.

⑧武井　彩佳、ホロコースト「現場」への考古学的アプローチ――テクノロジーが開く新たな次元、現代史研究、査読有、第 63 号、2017、51－62.

⑨小森　宏美、エストニア人道犯罪調査国際委員会と歴史家のアポリア、ロシア・ユーラシアの経済と社会、査読無、第 1005 巻、2016、29－33.

⑩小森　宏美、ラトヴィア歴史家委員会と戦う歴史外交、ロシア・ユーラシアの経済と社会、査読無、第 1005 号、2016、33－36.

〔学会発表〕（計 19 件）

①TURUMI taro, International Relations Within: When Russian Jews Become (Israeli) Jews, 2018 SNU-UT Joint Sociological Forum, Seoul, 2018.

②KOMORI hiromi, From Estonian Studies to Comparative Studies, International Conference and Seminar: Japan and Estonia: Contemporary Challenges in Humanities and Social Sciences, Tartu, Estonia, 2018.

③TAKAO chizuko, Jewish Question in the Russian Far East during Russian Civil War:1918-1922, The 25th International Annual Conference on Jewish Studies, Moscow, 2018.

④MIYAZAKI Haruka, History as a Resource of the Populist Radical Right: The Long-Term Aftermath of Anti-Semitic Campaigns, International Seminar: Polish-Jewish Relations and Anti-Semitism in Interwar Poland,
Kyoto, 2018.

⑤IDE takumi, Relationship between Confessions in the Slovak Nationalist Movement in the Early 20th Century, The 3rd International Workshop in Slavic and Eurasian Studies, Slovakia, 2017.

⑥武井　彩佳、東欧の「ホロコースト現場」の現在――新たな研究の展開と社会における意義、ドイツ現代史学会、共立女子大学、2017.

⑦野村　真理、帝国・国民国家・ユダヤ人――第一次世界大戦と中東欧のユダヤ人、愛岐教育大

学歴史学会、愛知教育大学、2017.
⑧David Wolff, Russia's Great War and Revolution: The Northeast Asian Front, Association for Slavic East European and Eurasian Studies, Washington, DC, 2016.
⑨高尾　千津子、変容するロシア・ユダヤ人の歴史像、日本ユダヤ学会、学習院女子大学、2016.
⑩鶴見　太郎、イスラエルの旧ソ連系ユダヤ人と政治社会、日本ユダヤ学会、学習院女子大学、2016.

〔図書〕（計７件）
①武井　彩佳、和解のリアル・ポリティクス――ドイツ人とユダヤ人、みすず書房、2017、279.
②高尾　千津子、野村　真理、宮崎　悠、鶴見　太郎　他、ユダヤ人と自治、岩波書店、2017、107-130、163-188、217-244、245-272.
③小森　宏美、野村　真理　他、せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題――ナチズムと社会主義の過去をめぐる葛藤、ミネルヴァ書房、2017、19-40、236-255、256-276.
④高尾　千津子、小森　宏美　他、越境する革命と民族：ロシア革命とソ連の世紀５、岩波書店、2017、95-124、263-288.
⑤高尾　千津子、小森　宏美、井出　匠　他、ロシア・東欧史における国家と国民の相貌、晃洋書房、2017、83-100、101－122,165-182.

６．研究組織
(1)研究分担者
野村　真理
(NOMURA, mari)
金沢大学
経済学経営学系
教授
20164741

小森　宏美
(KOMORI, hiromi)
早稲田大学
教育・総合科学学術院
教授
50353454

Wolff　David
北海道大学
スラブ・ユーラシア研究センター
教授
60435948

武井　彩佳
(TAKEI, ayaka)

学習院女子大学
国際文化交流学部
准教授
40409579

井出　匠
(IDE, takumi)
立教大学
文学部
特任准教授
40732665

鶴見　太郎
(TSURUMI, taro)
東京大学
大学院総合文化研究科
准教授
00735623

宮崎　悠
(MIYAZAKI, Haruka)
北海道教育大学
教育学部
講師
40507159

(2)研究協力者

重松　尚
(SHIGEMATSU, hisashi)
東京大学
大学院総合文化研究科博士後期課程